

不登校対応における養護教諭の不安感に関わる要因の検討

— チーム支援における役割と共同体感覚に着目して —

鳴門教育大学大学院学校教育研究科人間教育専攻 心理臨床コース臨床 心理学領域

指導教員 久米 禎子

北川村立北川小学校 養護教諭 和田 幸恵

【研究の概要】

本研究は、養護教諭の不登校対応におけるチーム支援での役割と共同体感覚に着目し、養護教諭が不登校対応の際に抱く不安感についてどのようなものと関連があるのかを検証した。

A 県の公立小学校・公立中学校の養護教諭を対象に質問紙調査を実施した。不安感について「不登校対応をめぐる悩み尺度」、チーム支援での役割認識について「不登校対応に関するチーム支援尺度」、共同体感覚について「共同体感覚尺度」を用いて、相関分析をした。研究仮説①として、不登校対応でのチーム支援の役割を認識できている養護教諭ほど不安感が少ない。仮説②として、不登校対応における共同体感覚をもっている養護教諭は、不登校対応における不安を感じにくい、と設定し検証した。その結果、仮説①は支持されなかった。仮説②は支持され、「不安」と共同体感覚に関連あることが明らかになった。この研究では、養護教諭が効果的に不登校支援で役割を果たすためには共同体感覚が大切になることが明らかになった。

【キーワード】 不登校対応 養護教諭 チーム支援での役割 共同体感覚

1 はじめに

近年、不登校児童生徒数が増加傾向にあり重大な問題となっており、養護教諭が不登校対応に関わる機会も増えてきている。伊藤（2003）は、不登校そのものが多様化し、いくつかの特徴を併せ持つ複合化したタイプも出現しており、不登校の理解や対応がますます難しくなっていると述べている。現在の不登校対応では組織的な支援が大切であると示されているが（文部科学省，2019）、養護教諭が不登校対応において役割の不明確さは不安を感じたり、対応上の迷いによる不安を抱える養護教諭が多いことがわかっている（伊藤，2003）。また、不登校対応において重要な役割を担っているが、養護教諭の約 8 割は一人配置である。そのため、初任者であっても専門職としての役割を担わざるを得ず、同じ職種の先輩から学ぶ機会も少ないため、不安や負担感を感じやすい現状がある。

(1) チーム支援の役割について

現在の不登校支援は、チーム支援による支援が行われている。その中で養護教諭が行っている支援では、平成 20 年 1 月の中央教育審議会答申では、「養護教諭は学校保健活動の推進に当たって中核的な役割を果たしており、（中略）学校内における連携、また医療関係者や福祉関係者など地域の関係機関との連携を推進することが必要となっている中、養護教諭はコーディネーターの役割を担う必要がある」と明記された。時代の変化に応じて多様に変化してきた養護教諭の役割に、新たな役割が追加されたことになる。また、児童生徒の問題の多様化に対して解決を目指すチーム支援の中で果たす役割である。養護教諭は職務の特質から、心身の健康問題を発見しやすい立場にあり、いじめや児童虐待などの早期発見・早期対応に果たす役割

様式 4

も求められている。石隈（1999）は、学校心理学の立場から、多様な問題を抱える児童生徒の問題解決をめざすチーム支援の中で、複合的ヘルパーとして養護教諭の役割を述べ、チーム支援の重要性を挙げている。保健室における養護教諭の援助サービスは、子どもの心身の問題を発見し援助することから重要となっている。しかし、久保（2017）は、校種による学校組織のあり方の違いによるものがあると述べており、現状として学校や教職員の考え方や役割認識でチーム学校の活用には差があると考えられる。瀬戸・岩隈（2003）は、校種によっても差がみられると述べており、チーム支援での役割の認識について校種差での不安感もあると考えられる。

(2) 共同体感覚について

共同体感覚は、アドラー心理学における理論的中心概念の一つである。Adler（1927）は、共同体感覚について、“他の人の目を見て、他の人の耳で聞き、他の人の心で感じる”という言葉が共同体感覚の許容し得る定義であると述べている。野田（1998）によると共同体感覚は“「私は共同体の一員だ」、「共同体は私のために役に立ってくれるんだ」という感覚である”「所属感・信頼感」、 “「私は共同体のために役に立っているんだ」という感覚”である「貢献感」「私は私のことが好きだ」という感覚”「自己受容」から構成されると述べている。

網谷(2001)は、不登校対応には無力感を感じる教師の苦悩を報告しており、一生懸命対応をする教師の無力感はバーンアウトにもつながりやすいとされている。長谷川・山口（2016）は、チーム支援体制の整備で共同体感覚が高まると教師のバーンアウトが軽減されることを報告されている。このことから不登校対応の役割の認識や支援方法の共通理解が行われることによって共同体感覚を高めることは、養護教諭の不安感に影響があると考えられる。

不登校対応でのチーム支援での役割認識による不安と共同体感覚には不安感との関連があるのではないかと考えた。これらのことから不登校対応での不安感が小さくなることは、養護教諭の専門性を活かした不登校支援ができるようになると思われる。

2 研究の目的

本研究では、養護教諭が不登校対応の際に抱く不安感についてどのようなものと関連しているかを明らかにする。その要因として、養護教諭の不登校対応における役割と共同体感覚に着目し、以下の仮説を考えた。

仮説①：養護教諭が不登校対応のチーム支援の役割を認識できている人ほど不安感が少ない。

仮説②：不登校対応における共同体感覚をもっている養護教諭は、不登校対応における不安を感じにくいと考える。

3 研究内容

(1) 対象と方法

A 県内の公立小学校・公立中学校 280 校の養護教諭を対象に自記式の質問紙調査を実施した。

171 校から回答があり、回答に不備のあった 3 校を除く 168 校（有効回答率 60%、小学校 122 校、中学校 56 校）を分析した。

ア フェイスシート

校種、年齢、経験年数、現在勤務する学校での勤務年数について回答を求めた。

イ 養護教諭の役職や不登校対応の経験に関する項目

様式 4

ウ 不登校対応をめぐる悩み尺度

養護教諭の保健室登校をめぐる悩みについて測定する、「多忙」「連携の難しさ」「対応上の迷い」3因子16項目からなる「保健室登校をめぐる悩み」(伊藤, 2003)を参考に項目の改変と追加し、使用した。不登校児童生徒へ養護教諭ができる支援を考えるために必要だと考え質問項目を検討した。「不登校対応をめぐる悩み尺度」は養護教諭が不登校対応について日々どんな考えや気持ちを持ち対応しているのかを分析する。

エ 不登校対応に関するチーム支援尺度

久保(2017)によって作成されたチーム支援に関する役割の認識を明らかにする尺度を用いた。

オ 共同体感覚尺度

信頼性・妥当性が確認されている、「所属感・信頼感」「貢献感」「自己受容」の3因子26項目から構成される、「小学校教師版共同体感覚尺度」(長谷川・山口, 2015)を採用した。オリジナルは小学校を対象に作られているが、項目の内容から中学校の養護教諭にも使用できると考えて使用した。

(2) 結果

ア 不登校対応をめぐる悩み尺度と不登校対応に関するチーム支援尺度の関連

(7) 不登校対応をめぐる悩み尺度と不登校対応に関するチーム支援尺度の全体の相関

養護教諭全体では「多忙」と「知識情報の提供」で弱い負の相関を示した。

つまり、「多忙」と感じている養護教諭ほど「知識情報の提供」がしにくいと感じていることが明らかになった。

Table1 不登校対応をめぐる悩み尺度と不登校対応に関するチーム支援尺度の相関

全 体	相談への環境づくり	知識情報の提供	相談ルート of 広報	提 案
不 安	.033	.025	.135	.050
多 忙	-.118	-.156*	-.066	-.124
連 携	-.062	-.071	-.014	.010

* p < .05

(イ) 不登校対応をめぐる悩み尺度と不登校対応に関するチーム支援尺度の校種別の相関

校種別相関では、小学校は有意な差はみられなかった。中学校で「多忙」と「提案」で弱い負の相関を示した。つまり、中学校では「多忙」と感じている養護教諭ほど「提案」しにくいと感じていることが明らかになった。

(ウ) 不登校対応をめぐる悩み尺度と不登校対応に関するチーム支援尺度の経験年数別相関

Table2 不登校対応をめぐる悩み尺度と不登校対応に関するチーム支援尺度の相関

経験年数		相談への環境づくり	知識情報の提供	相談ルート of 広報	提 案
3年未満	不 安	.080	.130	.177	.181
	多 忙	-.190	-.130	-.096	-.057
	連 携	-.031	.200	.299	.143
3~5年	不 安	-.057	-.142	.090	-.031
	多 忙	-.024	-.060	-.015	-.166
	連 携	-.112	-.157	-.097	-.006
6~9年	不 安	-.142	-.173	.124	-.222
	多 忙	-.358*	-.444*	-.094	-.075
	連 携	-.144	-.425*	.022	-.219
10~20年	不 安	-.402	-.028	.138	.349
	多 忙	.064	.040	.078	.269
	連 携	.130	.107	-.129	.421
20~30年 以上	不 安	.077	-.036	.122	.078
	多 忙	-.166	-.052	-.155	-.389
	連 携	-.158	-.168	-.167	-.304
講 師	不 安	.051	-.588**	.144	.181
	多 忙	-.152	.111	-.016	0
	連 携	-.077	.388	.096	.463*

** p < .01 * p < .05

不登校対応をめぐる悩み尺度と不登校対応に関するチーム支援尺度の経験年数別相関の結果を Table2 に示す。

経験年数が6~9年で「多忙」と「相談への環境づくり」で弱い負の相関を示した。

「多忙」と「知識情報の提供」で強い負の相関を示した。「連携」と「知識情報の提供」で強い負の相関を示した。

つまり、「多忙」と感じるほど「相談への環境づくり」「知識情報の提供」がしにくいと感じていることが明らかになった。

イ 不登校対応をめぐる悩み尺度と共同体感覚尺度の相関

(7) 不登校対応をめぐる悩み尺度と共同体感覚尺度の相関

不登校対応をめぐる悩み尺度と共同体感覚尺度の相関の結果を Table3 に示す。

不登校対応をめぐる悩み尺度の相関では、「不安」と「所属・信頼」、「貢献」で弱い負の相関を示した。

「不安」と「自己受容」で強い負の相関を示した。「多忙」は「所属・信頼」で弱い負の相関を示した。「連携」は「所属・信頼」「自己受容」で、弱い負の相関を示した。

つまり、「不安」が高いほど「所属・信頼」「貢献」「自己受容」が低いことが示された。また「多忙」と感じるほど「所属・信頼」が持ちにくいことが示された。

「連携」しにくくと感じるほど「所属・信頼」「自己受容」が低くなることが示された。

Table3 不登校対応をめぐる悩み尺度と共同体感覚尺度の相関

全 体	所属・信頼	貢 献	自己受容
不 安	-.263**	-.250**	-.453**
多 忙	-.205**	-.070	-.150
連 携	-.279**	-.085	-.327**

** p<.01

(イ) 不登校対応をめぐる悩み尺度と共同体感覚尺度の校種別の相関

不登校対応をめぐる悩み尺度と共同体感覚尺度で校種別相関の結果を Table4 に示す。

小学校では、「不安」と「貢献」で弱い負の相関を示した。「不安」と「自己受容」で強い負の相関を示した。

「連携」と「自己受容」で弱い負の相関を示した。

つまり、小学校では、「不安」が高いほど「貢献」「自己受容」も持ちにくいということが明らかになった。

中学校では、「不安」と「所属・信頼」「自己受容」で強い負の相関を示した。「不安」と「貢献」で弱い負の相関を示した。「多忙」と「所属・信頼」「自己受容」で弱い負の相関を示した。「連携」と「所属・信頼」「自己受容」で強い負の相関を示した。

中学校では、「不安」が高いほど、「所属・信頼」「貢献」「自己受容」が低いことが明らかになった。「多忙」と感じるほど、「所属・信頼」「貢献」「自己受容」が持ちにくいことが明らかになった。また、「連携」しにくくと感じるほど、「所属・信頼」「自己受容」が低いことが明らかになった。

Table4 不登校対応をめぐる悩み尺度と共同体感覚尺度の校種別の相関

校種		所属・信頼	貢献	自己受容
小学校	不安	-.161	-.224*	-.426**
	多忙	-.134	.048	-.090
	連携	-.159	-.039	-.247**
中学校	不安	-.425**	-.288*	-.496**
	多忙	-.382**	-.305*	-.293*
	連携	-.480**	-.134	-.444**

** p<.01 * p<.05

(ウ) 不登校対応をめぐる悩み尺度と共同体感覚尺度の経験年数別の相関

不登校対応をめぐる悩み尺度と共同体感覚尺度で経験年数の相関の結果を Table5 に示す。

経験年数別では、「不安」が高いと「所属・信頼」「貢献」「自己受容」低いことが明らかになった。

「多忙」では、「多忙」と感じるほど「所属・信頼」「貢献」「自己受容」が感じにくいことが明らかになった。

「連携」では、「連携」しにくいと感じるほど、「所属・信頼」「貢献」「自己受容」低いことが明らかになった。

経験年数 20~30 年では、「不安」と「所属・信頼」「貢献」「自己受容」のすべてで強い負の相関を示した。

つまり、経験年数が多くなるほど共同体感覚が高くなるということではないことが明らかになった。

Table5 不登校対応をめぐる悩み尺度と共同体感覚尺度の経験年数別の相関

経験年数		所属・信頼	貢献	自己受容
3年未満	不安	-0.267	-.640**	-.342*
	多忙	-0.156	-.368*	-.348*
	連携	-0.165	-0.196	-0.183
3~5年	不安	-0.114	-0.063	-.372*
	多忙	0.042	0.05	0.041
	連携	-0.063	-0.048	-.332*
6~9年	不安	-.375*	-0.078	-.582**
	多忙	-.379*	0.053	-0.279
	連携	-0.242	0.1	-0.327
10~20年	不安	-0.382	-0.23	-.457*
	多忙	-0.336	0.257	-0.206
	連携	-0.391	0.159	-0.268
20~30年以上	不安	-.485*	-.494*	-.549**
	多忙	-0.284	-0.321	-0.115
	連携	-.588**	-.478*	-.516*
講師	不安	-0.007	0.249	-0.117
	多忙	-0.045	-0.024	0.137
	連携	-.447*	0.096	-0.357

** p<.01 * p<.05

(3) 考察

ア 不登校対応をめぐる悩みと不登校対応に関するチーム支援の関連

本研究では、不登校対応でのチーム支援の役割を認識できている養護教諭ほど、不安感が少ないと仮説を立て検討した。結果として「不安」とチーム支援の役割の間には関連はみられなかったため、仮説は支持されなかった。しかし、「多忙」と「連携」との間に関連がみられた。

(ア) 「不安」の分析

「不安」との関連がみられなかったのは、養護教諭自身がチーム支援での役割を理解しているため、「不安」ではなく「多忙」と「連携」との間に関連が見られたと考えられる。

(イ) 「多忙」「連携」の分析

「多忙」と「連携」の間には関連がみられたのは、全体では、「多忙」と「知識情報提供」、

校種別では、中学校で「多忙」と「提案」、経験年数別では、経験年数 6～9 年では、「多忙」と「相談への環境づくり」、「連携」と「知識情報の提供」で関連が明らかになった。

秋光・白木（2010）は、他の役職を兼務することは養護教諭の多忙感や負担感といった悩みをさらに増悪させる可能性があるとして述べている。また、養護教諭の職務は、救急処置や事務的な仕事、不登校対応など、子どもニーズに合わせた支援、養護教諭が一人しかいないことで限られた時間の中で優先順位をつけ対応しなければならないことは日常である。こうした日常の中で、不安よりも多忙により役割を果たせていないと感じていると考えられる。今回の調査からも、養護教諭が担当する役職が不登校対応以外の複数あり、養護教諭が「多忙」となり、「相談への環境づくり」や「知識情報提供」が十分に行えないと感じていると考えられる。

「連携」と「知識情報の提供」では、教職員間のコミュニケーションがなかったり、関わりが希薄な環境であることは、連携できる環境でなければ必要となる情報共有ができないことが考えられる。講師では、「不安」と「知識情報の提供」、「連携」と「提案」で関連がみられたが、講師の勤務形態が 1 年雇用で、赴任した学校の 1 年目では学校環境や組織理解ができていないため、情報の提供や連携、提案が難しいことは理解できる。一方で、養護教諭の専門知識の情報提供やコーディネート力に課題があることが考えられる。日々変化していく時代とともに専門的な知識を学ぶ研修や一般教員同様にコーディネーター力を身につけることも必要になると考える。そのためにも研修など学ぶ場が必要であると考えられる。養護教諭のコーディネート力について、秋光・白木（2010）は、研修を通して専門知識が深まることによって、より積極的な活動が可能になると同時に、職務の満足感の上昇も期待できると述べている。これは、不登校対応だけでなく、より良いチーム支援につながると考える。

イ 不登校対応をめぐる悩みと共同体感覚尺度の関連

本研究では、不登校対応における共同体感覚をもっている養護教諭ほど、不登校対応における不安を感じにくいと仮説し検討した。結果として、不安と共同体感覚では、「不安」が高くなることで、「所属・信頼」「貢献」「自己受容」が低くなるという関連がみられた。この結果から、共同体感覚は不安と関連があることが明らかになったため、本研究の仮説は支持された。

(ア) 養護教諭全体の分析

不登校対応をめぐる悩み、共同体感覚尺度の全体の相関で、「不安」は「所属・信頼感」、「貢献」で弱い負の相関を示した。「不安」と「自己受容」で強い負の相関を示した。つまり、「不安」と「所属・信頼」「貢献」「自己受容」に関連があることが明らかになった。山口・長谷川（2016）は、学校における支援体制を整えることは共同体感覚を高め、教師のメンタルヘルスを向上させる重要な役割を果たしていると述べており、これは不登校対応における養護教諭も同様であると考えられる。

(イ) 経験年数別の分析

経験年数別の結果では、20～30 年以上で「不安」は「所属・信頼感」、「貢献」、「自己受容」で強い負の相関を示した。このことから経験年数が多くなることだけで、多様化する不登校児童生徒への関わりや対応ができることではないと考えられる。経験年数が多くても、不登校そのものが多様化し、いくつかの特徴を併せ持つ複合化したタイプも出現することにより、不登校の理解や対応がますます難しくなっていることが「不安」へつながっていることも考えられる。

様式 4

「多忙」では、経験年数が多くなることで任される仕事が増えていくことや日々の児童生徒対応などもあり、時間に追われることで多忙と感じているのではないかと考えられる。

「連携」では、「不安」と「多忙」の中で、先生方とのコミュニケーションをとることができにくい環境となり、貢献感を持つことができず低くなったのではないかと考えられる。網谷（2002）では、中学校では、バーンアウトの第一段階で生じる消耗感・疲労感を不登校担任教師のほうが一般教師よりも強く感じていると述べている。このことから不登校対応には、学校組織の連携やサポートの大切さが考えられる。不登校対応には余裕をもち対応することが大切になると考えられるため共同体感覚の必要性があると考えられる。これらのことから「不安」を小さくするためには共同体感覚を高めることが大切になると考えられる。

4 まとめ

本研究の目的は、養護教諭が不登校対応の際に抱く不安感についてどのようなものと関連しているかを明らかにすることだった。そのため不安と不登校対応におけるチーム支援の役割、次に不安と共同体感覚との関連について検討をした。

その結果、不登校対応に関するチーム支援の役割では、養護教諭自身の役割認識はできており、不安よりも多忙・連携と関連があること明らかとなった。共同体感覚では、共同体感覚がもっている人ほど不安が低いということが明らかになった。不登校対応には、学校組織で取り組むことや連携やサポートの大切さが考えられる。不登校対応においては、結果がすぐにでないことが多いため関わる教員や養護教諭に消耗感や疲弊感が起きやすい（網谷，2002）。不登校対応は、個人で行うのではなくチームで支援を行うことが大切になると考えられる。また、チーム支援を円滑に行うためには、養護教諭自身が不登校対応における役割を理解することと養護教諭だけでなく教職員間での共同体感覚が高いことが大切になると考えられる。

【引用文献】

- Adler, A. (1927). *Menschenkenntnis*. Frankfurt : Fischer Taschenbush-Verlag. 高尾利数 (1987). (訳). 人間知の心理学. 春秋社
- 秋光恵子・白木豊美 (2010). チーム援助に関するコーディネーション行動とその基盤となる能力・権限が養護教諭の職務満足感に及ぼす影響. *教育研究学*, 58, 34-45.
- 網谷綾香 (2002). 不登校児童生徒の担任教師におけるバーンアウト傾向の背景要因の検討. 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第三部, 51, 389-398.
- 長谷川恵・山口豊一 (2015). 小学校教師版共同体感覚の作成. 跡見学園女子大学文学部臨床心理学科紀要, 3, 51-60.
- 伊藤美奈子 (2003). 保健室登校の実態把握ならびに養護教諭の悩みと意識—スクールカウンセラーとの協働に注目して—. *教育心理学研究*, 51, 251-260.
- 石隈和紀 (1999). 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス—. *誠信書房*, 122-126.
- 久保昌子 (2017). 養護教諭の職務への期待に関する調査研究—養護教諭の役割意識と教職員の役割期待との比較—. *学校保健研究*, 58, 361-372.
- 文部科学省 (2019). 不登校児童生徒への支援の在り方について.
- 中澤理恵・朝倉隆司 (2016). 養護教諭の仕事関連ストレスと抑うつとの関連. *学校保健研究* 57, 304-322.
- 野田俊作 (1998). アドラー心理学トーキングセミナー. アニマ 2001.

様式 4

鈴木薫・淵上克義（2012）. これまでの養護教諭のコーディネーションに関する研究動向と今後の展望. 日本養護教諭教育学会, 15,43-49.

瀬戸美奈子・岩隈利紀（2003）. 中学校におけるチーム支援に関するコーディネーション行動とその基盤となる能力および権限の研究—スクールカウンセラー配置校を対象として—. 教育心理学研究,51,378-389.

山口豊一・長谷川恵（2016）. 小学校のチーム援助体制が共同体感覚及び教師のメンタルヘルスに及ぼす影響. 応用心理学研究,41,3,281-289.